

アナキズム方法論 (1)

坂 入 純 二

一、まえがき

塩長五郎氏の論文「構造主義と科学的アナキズム」(リベルテール、二、六月号)を興味深く拝見した。アナキズム社会科学を確立し、国家機構の解体とその後の秩序の保持をそこから科学的に導出しようとする労作である。すでに塩氏は、私はその一部しか拝読できなかったけれども、昭和の初頭にパンフレット「唯物弁証法と帰納演繹法」を日本自協から刊行され、雑誌「黒色戦線」「黒戦」「黒旗の下に」で方法論を論じておられる。今回の論文はこれらの成果を踏まえ、近年フランスを中心にして開拓された構造主義と帰納演繹法を連関させようとする、きわめて大胆な「未踏の問題を解明する意図のもの」である。塩氏の約半世紀にわたるご研究の結晶であって、これまで不当に閑却された領域に踏みこんだものだけに、今後の論旨の展開に大いに期待したいと思うし、きわめて重要な主題なのであるから、クロボトキンや塩氏からの継承発展があってほしいと思う。

従来、アナキズムの方法論に関する文献といえば、まさききにあげられるのがクロボトキンの『近代科学とア

ナキズム』であった。それ以降この分野での発展はほとんどみられないと言っても過言ではなからう。同著の初版が刊行されたのは一九〇一年であって、それ以後の科学論の発展は目をみはらせるものがある。特に自然科学(とりわけ物理学)のいちぢるしい発展(注(1))があったわけであるが、クロボトキンの同著が各方面の科学論の発展以前に執筆されたせいもあって、今日の時点からすると、クロボトキンの科学論は素朴な科学主義、科学万能主義、科学至上主義の感をいさかまぬがれない。しかしながら、それは時代の制約と言えるのであって、クロボトキン以後に発展がないのはアナキストの不勉強、怠慢のためである。

いうまでもなく、塩氏の援用される帰納演繹法はクロボトキンに由来する。では帰納演繹法とは何か。ふつう演繹法と帰納法の区別はデカルト以来の大陸合理主義とベーコン以来のイギリス経験主義の区別に相応していると言えようが、クロボトキンの主張する帰納演繹法とは広義の経験主義、実証主義の系譜に属すると私は思う。彼が弁証法を次のように歯牙にもかけないのはここに帰因するのであって、感情的なアンチ・マルクスではない。(後に詳論するつもりであるが、今はこの程度のことを予備知識としておいてほしい)。

「こうした(弁証法的方法の)断言のナイーヴさかげん、また、証明がいっさい欠けていることをおおい隠していたものは、漠然たる議論や曖昧模糊たる用語、ならびに不明瞭でグロテスクなまでに重苦しい文体とであつたにすぎない」。(注(2))

クロボトキンをうけた塩氏には、マルクスの唯物弁証法を批判し克服しようとする意図が鮮明にみられる。これには、塩氏自身が述懐されているように、昭和初期の思想と政治の状況の反映がある。つまり、「唯物弁証法の思惟方法が隆盛を極め」、マルクス主義の政治運動が「急激に隆盛を極め」、「勢いアナキズムやサンジカリズムの勢力」が削減された、という社会状況である。「それ故にアナキストにとっては、唯物弁証法とは何ものであるかという探究が焦眉の課題であり、同時に吾が方にもこれに對立する方法論の確立を必要とする事態に迫られたのである」(注(3))。この課題に立ち向かったのが塩氏であり、石川三四郎、八太舟三であるがけつして完全と言えるものではなかった。加藤一夫(『農本主義(理論篇)』にあるらしい)の批判について私は知らないが、いかなるものであつたらうか。とにかくアナキズムにおいてはこの方面の探究は発展どころか、片すみに追いやられ、座視されつづけている。弁証法をいかに受

けとめるか、アナキズムの方法論は何か、という根本的な問題はクロボトキンの『近代科学とアナキズム』で解決の方向が提示されたまま停滞している。この停滞とアナキズム運動の停滞は表裏一体の関係にある。(外国では、弁証法批判だけでなく、マルクスの社会主義、経済学をも批判の対象にしたピエール・ラムスが代表的なところである。アナキズムの側よりする最も体系的なマルクス主義批判であるが、いずれ拙論でとりあげることになろう)。

ところで、アナキストのすべてが弁証法に批判的であったのではなく、例外もある。たとえばブルードンがそうであって、彼は弁証法(系列の弁証法)を自己の理論体系の重要な礎石としている。ブルードン弁証法という用辞も使用されるのであるが、ブルードンの場合、弁証法とはいっても、カントやヘーゲルの伝統的な弁証法ではなく、彼独自のものであって、認識論上の概念としては経験主義に結びつくと思われる。私はブルードンの系列の弁証法についてはギェルヴィッチ、ド・ルバック、坂本慶一、その他の諸氏の邦語邦訳文献を参照したが、これについて最も明快であったのは佐藤茂行「ブルードンの『系列の理論法』について」(『経済論集』一九六八年七月号)である。同氏は次のように述べている。「

ブルードンの弁証法は、ヘーゲルなどが問題とする対立とか矛盾とかの関係とは、明らかに次元を異にしている。「ブルードンの（系列の弁証法における）『区別にもとづく同一性の追求』という原理は、経験論に共通した原理の一つであり……このことからみても彼の経験論的立場は確証される」。思うに、ブルードンにおいては弁証法も経験主義も不徹底であったのではあるまいか。本質的にブルードンの方法論が経験主義に立つものであり、ブルードンの方法論がクロボトキンの方法論とは矛盾しない、ということをおいばアドホック仮説として先へ進もうと思う。

現代では、塩氏の用語を借用すると、「他の思惟方法」によって、経験科学の方法論としての弁証法は、その全能性（トービッチによれば、「恣意的に操作可能な空虚な定式」）ゆえに克服され、無効性が立証されているように思われる。しかしながら、この場合、クロボトキンのように弁証法は全く無価値のものとしてしりぞけられるのではなく、「発見的原理」としての役割は認められている。ヘーゲル弁証法によるカント批判主義の補正と言えようが、方法論プロバの次元を越えて、経験科学の領域にこれを翻訳したとき、いかなる形態をとるのであろうか。

頭のなかでは明確な意義づけがなされているであろうが、二論文から判断するかぎり、具体的にどんな内容がこのエビセットに含意させておられるのか、必ずしも定かではない。科学とレトリック、科学とイデオロギーを区別される文意から、レトリックやイデオロギーと対立する概念としての「科学的」と推定されるのであるが正しい解釈といえるであろうか。たかだかエビセット一語というわけではなく、決定的なところであり、このエビセットの含意内容によって方法論追求の方角もおおよそ決まるのではないか。エビセットがいかに重要かということとは、アナキズムの上に「純正」か「サンジカリズム的」かを頭置したなら、理解できるであろう。

私が「科学的」というエビセットの含意内容に執着するのは、塩氏のあげ足をとるとか、重箱のスミをつつくとかのケチな考えからではない。第一に、自然科学の方法論と社会科学の方法論は同一であるか否か、現在のところ私は決しかねているからである。第二に、私は実証科学と規範科学、世界像と世界観、認識論と政治観、等々を厳密に区別し、それらを異次元のものととらえ、一方から他方を直接的に導出、帰結することはできない、と考えるからである。第二に関して、アナキズムはいずれの領域に属するのか、という問題がある。同じことだ

さて、ここでもまたやっかいな課題が提出される。つまり、この「他の思惟方法」とは具体的にいうと分析哲学（注(4)）のことであるが、分析哲学とアナキズムの関係の究明（注(5)）が必要とされるという課題である。ここにおいて再びアナキズムの方法論は何かということを求める作業が必要となり、つまるところクロボトキンへもどって行かざるをえない。結局、アナキズムの方法論が確立されていないかぎり、同種の問題は常に生ずることになるのであるが、逆に言うと、アナキズムの方法論が確立されているならば、アナキズムと他の思惟方法との対決もしくはフィードバックは比較的天やすく行なわれることになるはずである。いずれにしても、アナキズムの方法論が問題とされるところでは常にクロボトキンの『近代科学とアナキズム』が何らかの形で登場するのであろう。

塩氏の論文で私がつともこだわりを感じるのは、「科学的アナキズム」の「科学的」というエビセット（人や物の特性を示す形容語句と訳すべきか）である。俗に科学といえば自然科学をさすのであるから、科学的アナキズムとは自然科学的アナキズムと同義である。現にそういう用法もあり、未来のアナキズム社会の一構造が示される（注(6)）。塩氏の科学的アナキズムの場合、塩氏

が、いずれにも属さないのか、いずれかの一方に属するのか。結論だけを述べておくと、アナキズムはいずれにも属するということであり、見方を変えていうと、いずれをも包括するということであると私は思う。クロボトキンはときとして両者（実証科学と規範科学）を混同して筆を進めており、これは功利主義の倫理学の影響と思われるが、以下において私は、こうした諸点に十分に留意しつつ、「科学」には極力エビセットを付し意義を明確かつ限定して使用することにした。

塩氏はアナキズムの方法論とその社会科学を構造主義との連関において探究されているが、私は異なったルートを選ぼうと思う。私は独立した個別の経験科学から科学一般へ進もうと思う。すなわち、アナキズムと経済学との関連を追求することからアナキズムと社会科学、アナキズムの方法論へとさかのぼることにする。そこからいくつかの段階を経て再びアナキズムと経済学の関連へもどりたいと思うが、そのことはこの論稿の範囲外である。ここで私が経済学からはじめるのは、社会科学のなかでは経済学が最も体系的、独立的かつ「形而上学からの解放の度合が強い」科学であるからである。そして副次的には、アナキズムと経済学の関連の不明確なことがアナキズムの最大の弱点であるからでもあるが、この

弱点も不鮮明な方法論に起因すると思う。

予定よりも長い「はじめに」になったが、私の進路の方向はある程度定まったと思う。今、私は「らじかる」誌でエルツバッハー『アナキズム』について論じながら、アナキズムの思想と運動の歴史の方法論を模索しており、あと数回（おそらく約一年）でいよいよ序論に相当する部分が終了するが、そこでの目標は鋭利なオッカムのかみそりをふりまわしたり、英雄と大革命のみしか登場しない方法論ではなく、アナキズムのインターナル・ヒストリーやドグメン・ゲシヒテにとどまることなく、それらを踏まえつつ社会的コンテクストのなかでアナキズム思想と運動を把握する方法論の確立である。本誌と「らじかる」誌での二つの方法論追求は相補的な関係において論じたいと思う。

(1) かつて塩氏は「現代自然科学の危機」という表現を用いて、このことに言及された（『黒旗の下に』六号）。この点に関して私の念頭にあるのは武谷三男、坂田昌一の両氏の理論である。

(2) クロボトキンの酷評する「用語」と「文体」の一例を現代のマルクス主義者の著書から引用してお目にかけよう。

「廃業なんて言うなよ」

「廃業なんかしないよ」

「廃業なんて言葉を使うなって言うんだ」

「僕はアナキストとして弁証法を勉強してるつもりなのだ」

「大学を出て、まだ勉強してるのか」

大事なのは行動だ。俺はそう言いたかったのだ。行動がすべてだ。これが俺たちの信条だ。

「弁証法的アナキズムというのを僕は考えたいんだ」

「考える：？ 行動を考えろよ」

「その行動のための、もっとしっかりした理論が、僕らには必要だと思うんだ。そのため僕は弁証法的唯物論を勉強してるんだ」

「勉強で革命ができるかよ」

と俺はどなった。こんな奴に相談してもはじまらない。――

壺井繁治「アナ・ボル抗争時代時代の一挿話」による、彼は麻生義から「弁証法的アナキスト」というアダ名をつけられたという。塩、高見、壺井の所述から推測されるように、弁証法がアナ・ボル対立の一つの（あくまでも一つの）十字路であったが、このことは

「マルクス主義的唯物論においては、われわれの意識と存在とは、いわば函数的連関の項としての構造的契機であって、文字通り弁証法的な動力学において把捉される。……マルクス主義的唯物論は、人間の在り方を対象的活動として、しかも歴史的・社会的に共同主観化された被投的な対象的活動としてとらえ返し、この対象的活動の動力学に即して、その

Objectiv-Orjektivation に即してフェノメノンの被媒介性を定礎する」（広松渉『マルクス主義の地平』三九ページ）。

おそらく特殊な哲学的訓練を経たごく少数のものを除けば、右の文章を読んで、何のことかさっぱりわからないとネをあげるのがむしろ健全な頭脳ではあるまいか。こうした種類の「用語」や「文体」がマルクス主義やヘーゲル弁証法を帰依と崇拜の対象にしていく一面があるように思う。

(3) 高見順『いやな感じ』はこの雰囲気左記のように描写している。――

「俺はいま弁証法を勉強してるんだ」

「唯物弁証法：？？」

「だからって、アナキストを廃業したわけじゃない」

もう少し深く認識されてしかるべきであろう。

(4) ボバー、トリビッチュ、ウェルドンなどであって、その主著はすでに邦訳されている。

(5) リードはボバーに言及したことがあるが、やはり物足りないのはリードが芸術家であるからであろうか。

(6) 高橋和巳の小説『我が心は石にあらず』において。但し、この小説では正確に言うところ「科学的無政府主義」である。

（つづく）

野 火

大門一樹「奪る、奪られるの論理」

新評の七月号に、大門君がこの短かいがしかし鋭い一文をよせている。「売る」そして「買う」という貨幣を使用する現代経済の仕組の中で、買わねば消費できず、生きても行けない大衆は、安い安いと買わされたものの中に、生産や流通機構の中の企業家たちに吸いとられる利潤を仕払っている。それはパーセンテージとして小さなものだというだろうが、その数量が一つ二つの場合に小さいので大量となればどんなに大きいかは誰でも知っている。石油危機という言葉は石油会社にとって千載一

遇の好機だったし、政府は石油、鉄鋼、電力の値上げは止むを得ないといっている。こう言えば値上げ必至で多分の利益が見込まれて、莫大な政治献金がころがりこむ。五当三落でどれだけの選挙費がいるのだ。こうした金は、マトモな勤労者が倒立しても手に入らない金だ。それが政治家や企業家となれば手に入る。大衆は少しばかりのボーナスや昇給にゴマカサレテ買物に押しかけ、ヤット手に入れた品物にホットして、財布の底を見れば、もういくらに残っていない。百貨店や生産会社は大きく儲かる。政治献金もしインフレも続いて笑いの止まる時はない。消費者はストやたつて追いつくことではないのに、ストでチョッピリ増してもらえばもうストは解決する。賃金増加による生産原価増を口実に物価があがってもどうすることもできない。こうした物資と通貨の流通循環過程に、利息、利潤、通貨増発という操作が加わって大衆は常に奪われる。奪って裸にしたら自分たちも肥れないから、賃金やボーナスで喜ばせては絞って行く。今のプロレタリアは昔よりも多く与えられて、スト権までも与えられていると喜び、消費者は王様だとオダテラレテイルのだが、奪う機構は昔よりも精巧になっている。

大門君は「われわれは奪われている」と大衆が叫ぶ日本となったと冒頭に書いて、小田実の「世の中がまちが第二の大政党として社会党にも企業の献金が、たとえ少くても行っている筈だ。共産党だけが大きな口を叩いて献金を貰っていないと言うが、その官僚支配の組織を革命後に持ちこすことが奴等の革命であってみれば、救われないのは大衆だ。

大門君にお願いしたいのは、この奪ると奪られるの問題を、社会の表面だけの問題としてでなく、もっと突込んで書いて欲しいということだ。(三浦)

☆

「岩佐作太郎遺稿集刊行会」月報・1号2号がでた。岩佐老人と僕はいたって縁がうすく、数回会っただけに過ぎない。それに老人に好感を持たなかった人々も多く、耳に入る話も良いものではなかった。

しかし、アナーキスト クラブの素朴な人々に会って驚いたのは、この人々の心に深く深く「岩佐さん」という人格が食いこんでいることだった。これは決して容易なことではない。毀誉ほうへんを超えて、このように岩佐老人は生きている。そこには老人の中に一つの「つらぬかれた真実」があったのだ。

この月報は信太君が編集している。老人の真実を伝えようとするのだ。信太君は「あえて無理な名称をつけられ日本主義的(民族的)アナーキズムというべきものと

っている……つくり直しだ」という言葉を引用し、日本の気流の中に「奪られている」の意識化に大きく貢献したのは三月国会だと言っている。

一寸待ってくれ、国家がどのように貢献したのだろうか。野党がそんなジェスチュアをしただけではないのか。野党がどう食いついても何にもならない。野党の顔を一寸立ててやって済むというのがいつもの国会ではないか。それで会期が終れば国会報告演説をして次の選挙に備える、五当三落に応じて金策をする。国会などはある期間の芝居ではないか。昔から庶民は芝居は文盲者の学問と言ったが、国会がそれだけの役に立っているだろうか。「奪る」と「奪られる」は芝居じゃなく現実なのだ。こうした機構を肯定するか、否定するかが問題なのだ。こうした機構を肯定し、機構から金をもらって国会の議席を得ていながら、ジェスチュアで大衆をゴマカスの政治家の芝居ではないか。

さらに大門君は社会党の石橋書記長の「インフレは姿なき怪盗」と述べたと言っているが、前にも言ったように通貨増発を締めたりゆるめたりしながら、インフレを激化させないようにするのが世界共通のやり方だ。社会党が政権をとったからといって、このインフレが止められるのかと聞きたい。これもジェスチュアではないか。

思う」といっている。日本的といえば右翼的な反撥を感じるから民族の方をとりたいたい。いわば土着の思想としてのアナーキズムというべきであろう。土に深く根ざしたコミュニティから湧き出た思想としてこそ、アナーキズムは捕え返されねばならない。ここに塩君のいう社会の「構造」が考えられる。いまさらマルクスやレーニンの粕にしがみついてもならない。人間の根深い所に根ざすアナーキズムに立たねばならない。

☆

中村ふじゑさんからの訴え

「入管の厚い壁を前にして」

「金憲基君に特別在留許可を」

中村さんは杉並の永福二丁目で和菓子屋をしている。去年の十一月十五日夜突然、実直に働いている金君が警察につれて行かれた。無灯火で自転車に乗っていたからだという。迎えに行ったら密入国しているからと帰してくれず、外国人登録法違反で起訴され、十二月二十日執行猶予三年の六ヶ月の懲役になった。中村さんは苦しい中から百万円つくって十二月十三日に保釈ということになったのに拘留所から出たとたん入管の役人に捕えられ品川の収容所に送られ、十二月二十五日に強制退去を言い渡された。

中村さんの所では御両親が、彼が仮放免になって帰ったら養子にして和菓子屋を継がせるからと法務省に特別在留許可の再審嘆願をされたという。

この中村さん一家の善意を生かさねばならない。強制退去された金君の運命も考えねばならない。

中村さんは嘆願書に署名を求めておられる。「私の家に起きた事件ではありますが、大きな意味を含む問題だと思い、ご報告し、解決のためのご支援をお願する次第です」と。

署名用紙は次の所に請求されたい。

東京都杉並区永福二一五六―二

(電話東京三二二一九五六―) 中村ふじゑ

☆

『反体制エスベラント運動史』が大島義夫、宮本正男両氏の手で三省堂より出版された。

アナキズムエスベラント運動は明治社会主義の一環として平民社と共に出発したといつてよいだろう。後、大杉、山鹿などの努力を経て今日に至っている。しかし本書は「山鹿死後のアナキスト間のエスベラント運動は、残念ながら微々たるものである。アナキズム復興の時代とも言われる今日、大杉や山鹿の志をつこうとするアナキスト青年の少ないことは遺憾のきわみである。」と記

し、アナキズムエスベラント運動の低迷を残念に思っておられる。

アナキストの間でエスベラントが消滅したのではないことは戦後においても種々のエスベラントアナキズムの誌紙がでたし、又最近の『アナキズム』誌の積極的取り扱いなどをみてもわかるであろう。一方でみれば、エスベラント語自身も神近市子、青井知三などの指摘するように言語として人々の間における通用言語としての壁にぶつかっているのである。しかしアナキストは本書の次の言葉も忘れてはいけない。「まずこのエスベラントを今の資本主義社会のワクの中からでも守り育てていこうではないか。全世界に社会主義が実現してからあわててこの問題に取組んでみても間にあわない。」エスベラントが完璧かどうかは問題ではないのだ。エスベラントができた意図を考えるなら、不完全であっても積極的にエスベラントを必要とする方向性が個人にめばえるであろう。エスベラントは世界語ではなく、なんとか相互に意志を通じあおうとする一つの試みにすぎないのだ。エスベラントで世界の各地と交流を！

但し、本書は種々の著者の偏見が随所にみられる。それは個人評価を中心とし、イデオロギー対決をすり変えている所に指摘できる。これはとりまなおさずブチブル

スターリニズムの影響である。(吉葉)

☆

京都と名古屋から、共同合宿への呼びかけと「日本無政府主義者連盟綱領草案」「同規約草案」を付加したレジュメを送ってきた。すくなくとも、アナキストの連合を指向しているものなら、この問題提起を積極的にとりあげるべきであろう。正直いって、彼らはアナキストの全国的連合という問題を、京都なり名古屋なりの地域的視野で見えていないのではないか、という疑念が抜けきらないのであるが、もしそうであるならば、アナキストの全国的連合と、彼らの考えている連合との間にはギャップがあることになるだろう。これは何ら根拠のない疑念なら、それにこしたことはないのであるが、単なる思想別全国連合を、アナキストの全国的連合として作ろうとしているなら、アナキズム運動に混乱しかもたらさないだろうし、ぜひとも確かめておきたいところである。もっとも、こんな疑念が浮んでくるということ自体、京都や名古屋と我々の間には交流が疎遠だったということを示しているのであって、その意味では、逆にこのことがアナキストの全国的連合の必要性を示しているといえる。さらに、このレジュメを見ながら東京における連合への取り組みの立ち遅れを痛感した。

すでにタナトス社が全国的連合の必要を提起してから三年が立とうとしている。この間、東京では何らの深化もなかったといえるだろう。進展どころか、後退さえしているというのを、東京のアナキストはもう一度、再考してみる必要がないだろうか。(西塔)

☆今フランスで11名のスペイン・アナキスト達が逮捕されている。理由はフランスに於て銀行家(スペイン人)誘拐事件の犯人に擬せられたのだ。英国では7月の終りの土曜日、アナキストブラッククロス、セントロイベリコ、フリーダム、O・R・A、オックスフォードアナキスト、サンジカリストワーカー連合等の約70名の同志がフランス大使館ヘデモをかけ、抗議文を手渡した。

☆イタリア・アナキストの同志達はカミーロヴェルネリー研究センター創設のアピールを出した。ヴェルネリーの諸論文をマイクロフィルム化し、一九七五年には250万リールにするという。募金及び問合せは左記へ

Maria Teresa Pascarella

Via G. Sforza n.4

42100 Reggio Emilia, Italy

(莫空人)